

# 立体表現における形態の魅力に関する研究

## —木彫表現における「重力感」に視点を当てて—

都丸 洋一

Research on the attractiveness of forms in stereoscopic expression  
- Focus on "gravity sensation" in wood carving expression -

Yoichi TOMARU

### Abstract

This research focuses on the gravitational feeling of wood carvings and explores the attractiveness of the form, and tries to grasp the concrete aesthetic sense. As for how to proceed, I will first consider the attractiveness of three-dimensional works.. Next, I will focus on the "gravity sensation" that is one of the formative elements, and consider the existence of the attractiveness through three wooden carvings. As a result of my research, I propose the existence of a sense of gravity and the difference between beauty and attractiveness.

### Keywords:

aesthetic sense, attractiveness of forms, formative elements, gravity sensation, wood carving

## はじめに

作品を見た時、人はそれなりに何らかの感じ方をする。その感じ方は、さまざまであるが、例えば、感動を覚える作品や強く興味を引かれる作品、好感のもてる作品などの感じ方は、そこにプラスの感じ方をしていることが分かる。そして、そこには作品に対して魅力を感じている状況を捉えることができる。

この魅力の存在については、漠然としていてそれ以上の追究が難しいもののように思われるが、造形の要素を手がかりにして、更に踏み込んでその存在を探究していこうとするところにこの研究の特徴がある。

美術作品の捉え方は、美的な感覚を働かせるためにそれを言葉という共通言語で表現すると、そこに

誤差が生じてくる。そのため、先の「魅力」という感じ方においても一定のところまで、個人の感じ方にゆだねられたものといえよう。そして、その曖昧さが、芸術の価値に置き換えられているようにも捉えられなくはない。そこで、こうした漠然としたものに少しずつでも踏み込んでいくことによって、より深い鑑賞やより効果的な表現へとつなげていくことに役立つのではないかと考えた。

本研究は、このような意図を背景にもつものである。そして、着目したのは、「作品の魅力とは何か」という点である。言い換えれば、人を引きつける作品とはどういうものなのかという点である。この点を探究するに当たり、平面作品と立体作品との違いを考慮して、立体作品においてその魅力を探ることにした。また、より説得力のあるものにするために更に自身が関わっている木彫作品に限定して探究することにした。

その探究においては、立体表現を捉える際の基本的な視点として一般的に用いられている「量感」や「動勢」、「材質感」など造形の要素<sup>1)</sup>と言われるものを手がかりとすることにした。そして、この造形の要素の中でもあまり着目されていない「重力感」に視点を当てることにした。それによって、作品の魅力を生じさせている状況の一面をより説得力をもって提示することができ、漠然とした美的感覚に踏み込んでいけると考えたからである。

## 1. 研究目的

立体表現である木彫作品において、重力感の視点から形態の魅力について探究し、美的感覚の存在の具体的な把握に迫っていく。

## 2. 研究方法

本研究は、立体作品から感じ取れる形態の「魅力」に着目し、造形の要素を手がかりとしてその「魅力」の存在について追究していく。本研究の特徴としては、造形の要素として特に「重力感」の視点から形態の魅力を探っていく。そのために実際の立体作品として木彫作品を通して考察することによって、「重力感」からどのような「魅力」が生み出されているか、「魅力」と「重力感」の関係性をより説得力をもって探究する。

その探究の進め方においては、次の「図1 研究の構造」に基づいて展開する。

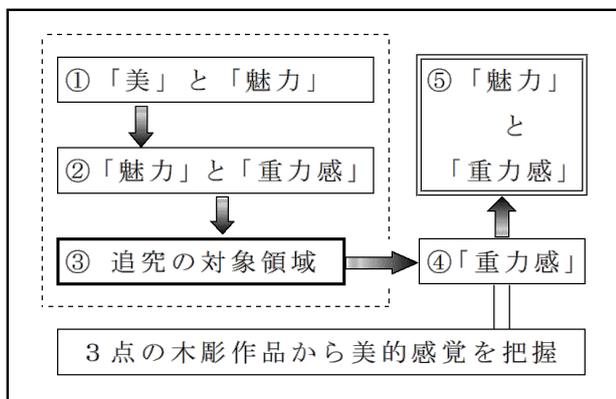


図1 研究の構造

まず、①作品から感じ取れる美と魅力の関係について把握し、次に②形態から生まれる魅力を捉える造形の要素の一つとして「重力感」に着目し、立体

作品の魅力を探究するために有効であることを把握する。そのうえで、研究対象が漠然とした感覚的なものであることから、再度③美と魅力の関係に着目して本研究が対象としている領域を確認する。このように基本的事項(①②③)を確認したうえで、④「重力感」の存在を明確にするために、具体的な立体作品をもとに考察を行う。そのため、ここでは自身が制作した木彫作品を手がかりとして「重力感」を実際の形態から捉えられるようにする。そして最後に、⑤魅力と重力感との関係を考察して美的感覚の存在を具体化して新たな提言を目指す。

## 3. 研究の内容

### 1) 作品を捉える美と魅力の関係について

立体作品からは、作品を前にした時にそこに現実の物として存在しているところに大きな特色を捉えることができる。二次元の絵画などに比べると、現実の空間の中で立体としての存在感を認識する。その存在感からは、素材から感じ取れる魅力や構成から生じる魅力、表現技法から生まれる魅力など様々な魅力の根源を捉えることができる。そして、どんな魅力を表現できるかによって、その作品としての評価が左右されるといえる。

一般的に作品の鑑賞は、感覚・感性に依存するところが大きい。作品の魅力とは、感覚・感性から生じるプラスの評価であるといえる。そのため、作品の魅力は、作品と向かい合ったときに感じ取れる感覚であるとともに制作者においても鑑賞者においても目指す先にある期待感であるともいえる。

ここで着目している魅力とは、美の追求という言葉借りれば正に美に相当するものといえよう。ただ美との違いは、美が一般的であるのに対して、魅力はそこに個性的な感覚を内在させていることである。特に美の感覚はあまりに感覚的であり究極的であるために、それ以上の追究を困難にしているといえよう。これに対して、魅力として捉えることによって、そこに探究の糸口が見えてくるように思われる。

例えば、立体作品と向かい合っ「量感」や「動勢」、「材質感」といった言葉を使って語られるところには、美というより魅力が語られていると捉えた方がより適切と思われるからである。その意味では、魅力の先の総体的な感覚としての美が位置付い

ているといえよう。

したがって、魅力に視点を当てることによって、感覚的で漠然とした一般的な美に対して、さらに踏み込んだ探究を可能にし、制作活動や作品鑑賞を深めるための有効な切り口となる存在ではないかと考えられる。

## 2) 造形の要素としての「重力感」

魅力を捉えるための要素として、先述の「量感」や「動勢」、「材質感」といったものは、造形の要素と言われている。こうした造形の感覚を捉える要素を手がかりとして作品を捉えることによって、漠然とした美の感覚を根拠のあるものとして把握することができると考えた。

特にこれら3点は、立体作品と向き合っ感じ取れる感覚を表現する時に、次のような意味で用いられる。

- ・量感・・・重さの感覚、堂々とした感じ、量の変化、など
- ・動勢・・・形態の勢い、力の変化、動きの方向性、など
- ・材質感・・・素材の感触、表面の表現効果、材質の特性、など

この他に造形的な感覚を捉える要素といえるものには、均衡や強調、対比なども含めれば多種多様である。このうち立体作品から受ける感覚を捉えるために特に重要視されるものを精選すれば、先の「量感」や「動勢」、「材質感」の他に「重力感」を加えることができるのではないだろうか。

その理由として立体作品の場合には、現実の物として現実空間に存在するところに大きく起因する。平面的な二次元の作品における空間は、一種の仮想空間である。これに対して、立体作品は現実空間に存在しているため、作品の置かれた場所や周囲の環境によってその印象が大きく影響されることを捉えることができる。そして、この空間による影響の根本には、「重力感」が位置していると考えられる。現実空間には、必然的に重力の影響が関わっている。そのため作品を観る人は暗黙のうちに重力を意識しているが、あまりに当然すぎるためにその意識が希薄になっている。実際、「量感」や「動勢」という感覚は、この「重力感」が前提となって捉えられる感覚といえる。

そのことは、先述の「均衡」からも説明できる。例えば、作品から何となく不安感や違和感、不自然

さが感じられる時、作品の重心がずれた状態で制作されていたり展示されたりしていたりすることが原因となっている場合が多くみられるからである。人の感覚は、日常の自然な状態との対比で捉えようとする。そのため、量感においては量の移動が理にかなっていないと不自然さを感じるし、動勢においても一部分の動きにこだわり、全体の動きとのつながりが明確でないと不自然さを感じる。

このように日常生活で感じている感覚が、作品を観るときに心地よさや不快感に影響を与えていることが分かる。この日常の感覚としてあまりに自然になりすぎている「重力感」は、作品を前にしたときに着目すべき重要な造形の要素であるといえる。そのため、作品の魅力を探究するために「重力感」を手がかりにして考察していくことによって、踏み込んだ理解が得られると考える。

## 3) 作品から生じる美と魅力の位置づけ

＜本研究の対象領域＞

重力感の重要性を捉えるために、先述で理にかなった表現の大切さに触れたが、自然の理にかなうということは、正にそこに美の存在を認めることができる。しかし、造形という視点からすれば、自然の理そのものを見せようとする表現は、静かな表現あるいは消極的な表現といった印象が生じる。では積極的な表現とはと考えると、自然の理を生かし作品の中に自然の理を消化させている表現といえるのではないだろうか。同じ美の表現を目指したものでそこには、単なる美の再現と美の創造との違いを捉えることができるからである。

また表現活動は、自由なのである。美を求めなくても、自然の理にかなわないものでも作品として存在する。このように広く表現を捉えてみると、美の追究を思考するには、プラスの美とマイナスの美という捉え方を取り入れていく必要が生まれてくる。そして、この研究では、プラスの美を追究するものであることをここで押さえておきたい。

また同じように美を思考する視点としての「魅力」においても、既に(1)で魅力をプラスの評価と捉えたことから、必然的にそこにプラスの魅力に対してマイナスの魅力を意識する必要が生まれてくる。そして、この研究では、プラスの魅力に視点を当てて探究していることもここで押さえておきたい。そして、この場合の魅力とは、正に感覚的なものであるが、心を引かれる、しかも心がうきうきする、さらに明る

い驚きを感じずる感覚といった言語表現がそれに当てはまると考えられる。

では、マイナスの魅力とは、何を意味するものであるか。それは、端的に言えば魅力が存在しないとか、魅力が感じられないということになる。あるいは嫌悪感を感じるとか、不安感をあおる、憂鬱になるなどがマイナスとして考えられる。それは、制作者の立場からするとプラスの魅力を否定した表現を試みているとか、鑑賞者の立場からすればプラスの魅力に興味を感じない心の状況などを想定することができる。

このようにこの研究が対象としている領域を規定するために、美と魅力について論述し、そこに再現的表現と創造的表現という区分を用いた。それによって、本研究の対象領域を次のように図式化することができる。このことから、本研究では、図2の創造的表現の領域において、重力感を手がかりとしてその魅力について美的探究をしていくことをここで押さえておくこととする。

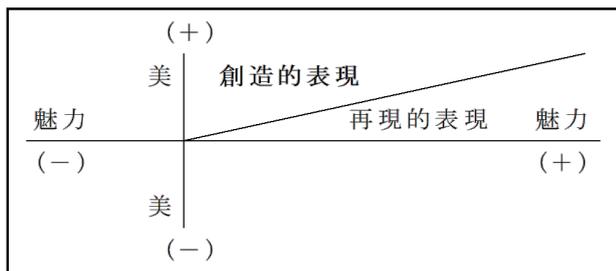


図2 美と魅力に関する研究対象領域

#### 4) 木彫作品から捉えられる「重力感」

以上のように研究の基本的な枠組みを規定したうえで、次に具体的な木彫作品として作品A～Cの3点を通して、その制作過程や制作の意図、さらに重力感から生まれる魅力がどのように感じ取れるかといった点について美的感覚を働かせて考察を行い、作品の魅力と重量感の関係について探っていくことにする。

##### <作品A> 『ゆるんだ綱』 2)

この作品は、一本の太い楓の丸太を約3分の1の長さのところで角度を付けて裁断し、片方の丸太を180度回転させて再び接合した木材から掘り出した形態である。また、綱状の物は、別の木材を加工して接合した。

この制作においては、大きな量感のある物体と綱状の物との関係性によって魅力を表現しようと試み



た。その関係性とは、大きな物体が綱によって締め上げられるようにしまつて強い力で上に引き上げられるというものであるが、綱がゆるんだことによって重力感に変化が生まれ、緊張感のゆるみからこの後の形態の動きを予感させることによって魅力を生じさせることができると考えて制作に至った。

ここには、重い物を引き上げるためにピンと張って重力に抵抗する表現とは異なり、曲線・曲面でゆるんだ綱を表現することによって、重力の影響を受けている感覚を観る者に感じさせている。それが、先ほどまで綱によって締め上げられていた大きな物体との対比によって、重力感を伴った関係がその後の展開を想起させて魅力へと展開することを可能にしているといえる。

##### <作品B> 『赤い玉』 3)



この作品は、桜の大きな丸太から彫りだした形態である。この形態を彫り出すために、丸太の内部を大きく取り除いて表現した。

この制作においては、赤い玉が重力の影響を受け

ずに浮遊している状況表現しようと試みた。そのため、何らかの形態によって、物理的に玉の重さを支える存在が必要であった。それも、硬そうで重そうな赤い玉を支えていると感じさせないようにする必要があった。そのため力強さではなく柔らかく柔軟性を感じさせる必要から、写真のように布状の材質感が感じ取れる形態の表現を目指した。また、床との接着面を少なくすることによって、軽さが強調されるよう制作した。

このような意図で制作した結果、布状のものが赤い玉を支えるのではなく、赤い玉が布状のものを支えて浮遊しているように感じられ、実際の重力感を逆転させるように表現することができた。この逆転の表現が、観る者に魅力を生じさせているといえる。

ここにも、作品Aで確認したように二者の関係が存在している。つまり、赤い玉と布状の物との関係性である。あのように大きな玉が浮かぶはずはないのに、布状の形態の材質感と動勢によって錯覚を起こさせている。重力感という慣れ親しんだ感覚のもとで、実際の重量感と視覚的な重量感とが交錯して魅力を生み出しているといえる。

#### <作品C> 『手がかり』 4)



この作品は、建築用の木材を接合して制作したものである。そのため、作品Bのように多くの木くずを出すことなく、効率的に木材を生かすことができ

た。また、重力感という視点をより焦点化するように制作した。

この制作においては、作品A・Bが重量のある物から重力感を感じさせようとしていたのに対して、重量感をできるだけ押さえた中で重力感が感じ取れるよう試みた。そのため、できるだけ高い空間を活用することにした。具体的には、ひも状の物は重力が働いて垂れ下がっているのに対して、上部の角材は変化を出不さず重力が感じられないように表現したかった。そのためひも状の下部の形態は、地面近くで重力の影響下にあるように表現した。そして角材は、その状況と距離をとって上空に存在させることによって、宙に浮いた感じを強調することができる考えた。

このような意図の下で制作した結果、角材は宙にありながらしかも小さい存在の形態でありながら、空間に存在感を与えている。この表現効果は、作品Bの効果を発展させた結果としての表現である。つまり、少ない量感で支える物と支えられる物との関係を逆転させて魅力を生じさせている。しかも、そこには作品A・Bと同様に2つの関係性がある。材質感の異なる表現がより重力感を強調し、観る者の感覚に働きかけて魅力となっていることを捉えることができる。

#### 5) 作品の魅力と重力感との関係性

上記のように具体的な木彫作品を通して、その背景にある制作者の意図を踏まえながら、重力感という感覚を共有し、その感覚が観る者に魅力という意識を生じさせていることを確認してきた。

そこで、上記の捉え方を基に、作品の魅力と重力感との関係を整理してみたい。

##### <2つの形態の関係>

まず、3点の作品の考察を通して共通して「2つの形態の関係」という視点を捉えることができた。それは、作品Aでいえば「綱と大きな物体」であり、作品Bでいえば「赤い玉と布らしき物」であり、作品Cでいえば「角材とひも状の物」である。そして、これらの関係性をそれぞれ論じることによって、重量感やその魅力を捉えることができた。

##### <関係性>

その「関係性」においては、重量感や柔軟性、垂れ下がり感といった「材質感」が重力感に大きく影響していたが、その関係性を論ずる中で、「対比」やそれを受けて「差異」に着目してきた。

<対比>

「対比」については、作品Aでは「ゆるんだ綱⇄締め上げられた大きな物体」であり、作品Bでは「宙に浮いた玉⇄垂れ下がった布らしき物」であり、作品Cでは「宙に浮いた角材⇄垂れ下がるひも状の物」である。

<差異>

また「差異」については、作品Aは「ゆるみ⇄しまり」であり、作品Bでは「堅さ・重さ⇄柔らかさ・柔軟性」であり、作品Cでは「変化のない形態⇄垂れ下がり」である。

このように3点の木彫作品の考察を通して、その共通する視点を整理してみると、さらにそこから重力と魅力の関係について、次のように段階的に5つの認識を抽出することができる。

(1) 2つの形態の「関係性」から、重力感が生まれる。

立体作品から重力感を表現する方法はさまざまに存在すると思われるが、上記3点の作品からは、2つの形態を関係させることによってそこに重力感が生まれていた。

(2) 「材質感」によって、重力感が強調される。

綱と重い物体、球形の玉と布状の物、角材とひも状の物といった材質や存在感の違いによって、重力感が一層強調される。

(3) 異なる重力感の「対比」によって、魅力が生まれる。

引き上げられる形態とゆるんだ綱のように張りつめた綱とゆるみという重力感の対比によって魅力が生まれる。そのことは、浮く物と支えられ物との重力感の対比によっても魅力を生じさせている。

(4) 通常の重力感との「差異」によって、魅力が強調される。

玉を支えている布状の物が玉に支えられているように感じられるところや、角材を支えている垂れ下がったひも状の物が角材に支えられているように感じられるところが魅力を大きくしている。また、大きな物体を引き上げるために張りつめた綱であるはずが通常に反してゆるんだ綱として表現されることによって、大きい物体の今後の動きを予感させてそのことが魅力を大きくしている。

(5) 異質な重力感の魅力は、観る側が創り出している。

上記(4)からは、魅力を大きくする存在として「錯視」や「予感」といった要素を抽出することができる。そして、これらは、観る側によって創り出されるものである。通常の重力感から異質な重力感を自身の感覚で創造し、その差異に魅力を生じさせている。

これら5つの認識から、重力感と魅力との関係性についてさらに考察してみたい。すると、次のように整理できる。

.....

魅力とは、観る側の者が、自らの「感覚」によって生じさせているものであることが捉えられる。

そしてその感覚は、作品の中の2つの形態の「関係性」によって生まれている。その関係性とは、「対比」であり「差異」の感覚である。そしてこの感覚を生じさせるものの1つとして「重力感」が作用している。

この感覚は、観る側の日常において培われた感覚によるもので、その感覚に反する表現が通常感覚と共存することによってそこに「魅力」が生まれるといえる。

.....

このことから魅力とは、作品を観る側の感覚であり、日常の感覚との比較・対比によって生じる差異によって、自ら生じさせている感覚であるといえる。

そのため、制作者からすれば、観る側の感覚に働きかけて「錯視」や「予感」といった意識を生じさせられるように表現することであり、いかに意図的・計画的に魅力を創造できるかが制作者としての表現力を評価する視点となるといえる。

## 4. 研究のまとめ

この研究では、立体作品における形態の「魅力」について探究した。その魅力については、多様なものであることを前提にしたうえで探究の範疇を規定し、立体表現における「重力感」という造形を捉える一つの要素に着目した。また表現の多様性の現状から、美と魅力の座標軸を用いて探究の対象領域を規定した。そのうえで、作品の魅力を木彫作品を通して具体的に考察して探究した。

その結果、「重力感」を手がかりにして「魅力」について、次のように導き出した。

## 1) 研究の成果

まず3点の作品の考察から、共有する関係と存在を次のように捉えた。

(ア) 1つの作品の中に内在する2つの形態の関係

(イ) その関係性における「対比」や「差異」の存在  
さらに上記を基に重力感から生まれる魅力について、段階的に5つの認識を確認した。

- (1) 2つの形態の「関係性」から、重力感が生まれる。
- (2) 「材質感」によって、重力感が強調される。
- (3) 異なる重力感の「対比」によって、魅力が生まれる。
- (4) 通常の重力感との「差異」によって、魅力が強調される。
- (5) 異質な重力感の魅力は、観る側が創り出している。

そして、さらに考察を進めて重力感の視点から、魅力の存在を整理した。また作品の魅力に対して、観る側と制作する側との根本的な相異を端的に把握した。

## 2) 今後の課題

この研究は、多様な作品、多様な表現、多様な感覚が混在する現実世界にあって、作品の魅力立体作品の形態という枠で限定し、さらに重力感という視点を焦点化して展開した研究である。したがって、魅力のほんの一部に手を付けた研究にすぎない。

そのため、今後においては、枠組みを限定しながら切り込み口を増やしていく必要がある。また、魅力に関するより根本的、普遍的な理解が得られるように、その探究の仕方を探ることも必要と考える。

## おわりに

表現活動は、自由なものである。また作品の鑑賞も自由なものである。こうしなければならないということはない。作品は多様である。感覚も自由である。だからこそ、その感覚に対しては、正直であるべきである。そして、ここで着目した「魅力」という感覚・認識は、人を駆り立てる力を内在しているように思う。

しかし、「美」はあまりに漠然としている。本研究が、「美」に対して一歩踏み込むことに役立ってくれることを願っている。

## 注・引用・参考文献

1) 造形の要素という言葉については、下記書籍のp.90において、次のように用いている。「立体に表す構想では、量感や動勢を捉えたり、形をデフォルメしたりすることや、材料を組み替えたりすることなどが考えられる。その際、〔共通事項〕の指導と関連させ、造形の要素の働きや、全体のイメージで捉えるということを理解させながら指導することも大切である。」またp.127には、「また、彫刻をみたときに、動勢という視点をもつことで、気付かなかった作品の動きや躍動感に気付くことである。指導に当たっては、これらの効果などと造形の要素の働きとの関係について考えさせることや、知ることにより対象を捉える新たな視点をもつことができるようにすることなどが考えられる。」とあり、作品を捉える視点として造形の要素という言葉を用いている。『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説美術編』文部科学省、2018年

2) 木彫作品、都丸洋一『ゆるんだ綱』第99回二科展、2015年、H175×W87×D67cm

3) 木彫作品、都丸洋一『赤い玉』第64回群馬県美術展、2013年制作、H70×W74×D35cm

4) 木彫作品、都丸洋一『手がかり』第73回群馬県美術展、2022年制作、H174×W75×D83cm

